

特集展示

たつ うま

辰馬考古資料館の名品

—鉄斎との交流、考古学に寄せるまなざし—



重要文化財 阿倍仲麻呂明州望月・円通大師呉門隠栖図 富岡鉄斎筆 大正3年(1914) 【8月11日～9月6日展示】

Feature Exhibition

MASTERWORKS OF THE TATSUUMA COLLECTION OF FINE ARTS From Archaeological Artifacts to Tomioka Tessai

2026

7月14日(火)—9月6日(日)

※会期中、一部の作品は展示替を行います。

京都国立博物館 平成知新館 3F-1・2、2F-1・2

重要文化財 袈裟禪文銅鐸(辰馬416号鐸) 大阪府南河内郡太子町鹿谷寺出土 弥生時代中期

辰馬考古資料館とは

兵庫県西宮市に所在し、日本を中心とする東アジアの考古資料と富岡鉄斎の作品を軸に保管、研究、公開をおこなっています(現在は資料館建替に伴い休館中)。設立者である辰馬悦蔵(1892～1980)は、灘の銘酒、白鷹の蔵元で名をはせた実業家です。一方で京都帝国大学で考古学を修めた考古学者でもありました。

神戸市桜ヶ丘遺跡(国宝 桜ヶ丘銅鐸・銅戈群出土地)で記念撮影(写真左から2番目が辰馬悦蔵)



1 辰馬家と銅鐸蒐集

辰馬悦蔵は、若くして家業を継いだ後も考古学への情熱は冷めることはありませんでした。彼は事業のかたわら、研究を続ける中で銅鐸が散逸している状況を知り、自ら蒐集することでその保全を図ろうと考えました。研究者の助言や、骨董商の協力を受けながら、蒐集した銅鐸の総数は50個を越えます。蒐集品のなかには、自ら現地調査や化学分析を実施し報告をまとめたものや、祖父悦叟が入手していたもの、別々に入手した破片が後に同一の銅鐸と確認できたものなどがあります。さらには江戸時代の書物に描かれた資料の来歴を調査するなど、活動は単なる蒐集の枠を越え多岐にわたりました。



重要文化財 流水文銅鐸(井向1号鐸・辰馬403号鐸)
福井県坂井市井向出土 弥生時代中期



コラム 花入れに転用された銅鐸

辰馬考古資料館が所蔵する銅鐸の多くは購入品であり、その中には出土後に花入れに改変されたものが多く含まれます。これらのほとんどは、江戸時代に加工されたと考えられています。室町時代には、中国から輸入した青銅製の花入れが珍重されましたが、これを踏まえて、銅鐸を花入れに転用することも始まったのでしょう。現代に生きる私たちの感覚では思いもよらぬ活用方法ですが、近代以前の人々が、偶然見つけた銅鐸に新たな価値を見出し、創意工夫を加えた興味深い事例です。

袈裟禪文銅鐸(辰馬453号鐸) 出土地不詳 弥生時代中期

銅鐸の変遷

銅鐸は弥生時代中期から後期にかけて、近畿を中心とする地域で作られ、重要な祭祀に使われた青銅製の祭器です。朝鮮半島の小銅鐸を祖型とし、これを大型にして全体に文様を飾ったもので、現在600個近く出土しています。銅鐸は、大きさ・形態・装飾などが変化に富んでおり、その多様性は、弥生時代の社会の構造や地域間の関係などを考えるうえで重要な手がかりとなっています。銅鐸は吊り手である鈕が、しだいに本来の機能を失い装飾化していきます。その過程に着目して、菱環鈕式、外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕式の4型式に大別し、この順に新しくなります。本展では、この4型式を、最古段階、古段階、中段階、新段階と呼称し、それぞれを前半と後半に二分しています。



2 辰馬考古資料館の 考古コレクションの特徴

辰馬考古資料館は、銅鐸のほかにも縄文土器や土偶などの縄文時代の資料や、古墳時代や古代、東アジアの考古資料も多く所蔵しています。縄文時代の資料は、北東北や関東東部、飛騨地域と出土地に偏りがあります。これはその地域の有識者による蒐集品を辰馬悦蔵がまとめて受け入れたためです。これにより資料の散逸がまぬがれるとともに、地域的な様相がわかる資料として学術的価値も保持されることになりました。



重要文化財 人面装飾付注口土器
茨城県稲敷市福田貝塚出土 縄文時代晩期



重要美術品 鮑貝形土器
茨城県稲敷市椎塚貝塚出土 縄文時代後期



重要美術品 獣形土製品
茨城県稲敷市椎塚貝塚出土 縄文時代後期



重要文化財 ミミズク土偶
千葉県銚子市余山貝塚出土 縄文時代後期



重要文化財 注口土器
茨城県稲敷市椎塚貝塚出土 縄文時代後期



重要美術品 中空土偶
千葉県印旛郡栄町龍角寺出土 縄文時代晩期



コラム 悦蔵と玉類の研究

「悦蔵」はもともと初代の本名であり、以後3代の辰馬家当主が称する通り名でもありました。本名は寛爾といいます。大学在学中に先代の跡を継いだため、卒業論文を含め著作類はすべて悦蔵の名で記されています。京都帝国大学に提出した卒業論文では、玉類をテーマに取り上げました。論文からは、玉類の材質の差や時代幅を小さく捉えずに、広く研究を進めていたことがわかります。蒐集の中心が銅鐸に移った後も玉類への関心は生涯消えることなく、郷土史の同好の集まりである西宮史談会で自身の研究成果を報告することもありました。写真の硬玉製玉類は晩年まで大事に手元に置いていたもので、思い入れの深さがうかがえます。

卒業論文「わが国先史原史同時代玉類の考古学的研究」(辰馬悦蔵著)と悦蔵愛蔵の硬玉(ヒスイ)製玉類

ユニークな造形の器物が多い 縄文コレクション

縄文時代の資料は、茨城県福田貝塚や椎塚貝塚、千葉県余山貝塚、青森県の亀ヶ岡遺跡や十腰内遺跡など、学史的にも著名な遺跡の資料が多く含まれます。これらは縄文時代後期から晩期にかけてのものが中心で、人面装飾付注口土器や土偶、土面、貝や動物をかたどった土製品など、儀礼に関わる特殊な器物が多いことが特徴です。



土面
岩手県一関市大原出土 縄文時代晩期



重要美術品 鹿角製装身具
宮城県東松島市里浜貝塚出土 縄文時代晩期



重要美術品 遮光器土偶
青森県つがる市木造亀ヶ岡出土 縄文時代晩期



下部単孔土器
岩手県二戸市奥山出土 縄文時代後期



重要文化財 注口土器
青森県つがる市木造亀ヶ岡出土 縄文時代晩期



古墳時代前期に日本で製作された倭製鏡で、中国・漢代の方格規矩四神鏡を祖形とします。ただし、本鏡は内区の方格渦文が鏡背全面へと拡張し、本来は外区に施されるはずの菱雲文帯を鏡面の周囲に鑄出すという、大胆かつ特異な意匠上の試みがなされています。

重要文化財 変形方格渦文鏡 出土地不詳 古墳時代前期



古墳に副葬されたと考えられます。肩部に作られた3個の小壺の間に、魚龍を腰に下げる人物、羽根をひろげた鳥、魚の小像が配されます。いずれも稚拙ながら生き生きとした造形で、鵜飼の情景を表現していると考えられます。

装飾付台付須恵器
岡山県瀬戸内市長船町出土 古墳時代後期

3 辰馬家と富岡鉄斎

灘の酒造家、辰馬悦叟は富岡鉄斎(1836～1924)と親交があり、多くの鉄斎作品を蒐集しました。1歳違いの2人が連絡を取り合うようになるのは意外にも遅く明治40年(1907)頃で、両者ともに70歳を過ぎてからのことでした。そのやり取りも手紙が中心だったようですが、大正2年(1913)に辰馬家を訪れた鉄斎は、同家滞在中に「阿倍仲麻呂明州望月・円通大師呉門隱栖図」(8月11日～9月6日展示)を制作しています。これ以降、「王石谷草堂図」など悦叟のために手掛けた作品は少なくありませんが、両者の出会いを遡る時期の作品も収蔵され、鉄斎の各年代を網羅する一大コレクションとなっています。



最後の文人画家 富岡鉄斎

富岡鉄斎は京都に生まれ、文人の理想である「万卷の書を読み万里の路を行く」ことを実践した学者・文人画家です。東洋の画法を研究し、中国や日本の歴史、故事、逸話などを主題に、深い意味を含んだ独創的な作品を多く生み出しました。画業の鉄斎、酒造りの悦叟と、ともに理想を求めるものとして2人は親交を深めました。

富岡鉄斎(左)と辰馬悦叟(右)



76歳の鉄斎が辰馬悦叟のために制作しました。中国・清時代を代表する文人画家、王石谷(王翬)の画室を描いた作品で、賛には、書物を読んで人格を修養することが絵を描く上で肝要であることなどが述べられています。質素な庵として描かれる画室は、鉄斎が理想とした文人世界を象徴的に表しています。伝王翬筆「耕煙草堂図」(京都国立博物館蔵)から図様を借用したようです。

王石谷草堂図 富岡鉄斎筆
明治44年(1911)



群傳高会図 富岡鉄斎筆
大正7年(1918)【8月11日～9月6日展示】



玉堂富貴図 富岡鉄斎筆
江戸時代 19世紀



一休蓮如問答図 富岡鉄斎筆
大正13年(1924)



登嶽図巻 富岡鉄斎筆 明治8年(1875)

鉄斎40歳の作。この年、鉄斎は富士山に登頂しており、自題に「登嶽餘韻」とあるように、その感動が覚めないうちに制作したもの。甲州石花湖(精進湖)から始まり、吉田登山口を経て、5合目、8合目と山小屋(石室)に立ち寄りつつ頂上へと歩を進めた様子が手に取るようにわかります。



重要文化財 阿倍仲麻呂明州望月・円通大師呉門隱栖図 富岡鉄斎筆 大正3年(1914)【8月11日～9月6日展示】



鉄斎79歳の作。右隻は、留学生として遣唐使の一員に加わっていた阿倍仲麻呂が、長きにわたる唐での仕官を経て帰朝するにあたり、明州(寧波)での送別会の席上、海上に昇る月を見て望郷の和歌一首を詠んだ場面を描いています。賛には、仲麻呂が別離の心情を吐露した五言詩と、「天の原」の和歌が万葉仮名で記されています。左隻は、入宋して円通大師の号を得た天台僧寂照が、帰朝せず蘇州の呉門寺に隠棲する様子が描かれます。賛は、大師の帰朝を切々と促す関白藤原道長の手紙と、『宋史』所収の寂照伝を書写したものです。

4 文人へのあこがれ

悦叟の孫にあたる辰馬悦蔵は、考古資料の蒐集と研究で知られますが、一方で江戸時代の博物学者、木村兼葎堂(1736~1802)関連の資料も蒐集していました。その内訳は、兼葎堂の自筆本・書写本・旧蔵書・考古資料(鏡)で、江戸時代最大の「知の巨人」の実像を伝えるきわめて貴重な資料群です。鉄斎は頼山陽・池大雅といった学者・文人を尊崇していましたが、兼葎堂も彼が関心を寄せた一人でした。実際、悦蔵蒐集の兼葎堂資料には、鉄斎の旧蔵品も多く含まれています。こうした鉄斎の志向からの感化に加え、兼葎堂が自らと同じように酒造を生業としていたことも、悦蔵による蒐集を促したものと考えられます。



兼葎堂雑記 木村兼葎堂筆
江戸時代 18世紀



奇貝圖譜 木村兼葎堂筆
江戸時代 18世紀



山陽頼山先生像 富岡鉄斎筆
明治16年(1883)

コラム 鉄斎が熱望した頼山陽の印

「山碧水明」印は、頼春水が布字し、子の山陽が刻したもの。山陽を尊崇した鉄斎は、この印にとりわけ強い思い入れを抱いていました。辰馬家のために「阿倍仲麻呂明州望月・円通大師呉門隱栖図」を描いた際には、自らの印章とともにこの印を捺しています。大正10年、悦蔵の墓碑銘を撰述した鉄斎は、その潤筆料としてこの印を所望しました。これを秘蔵の宝としていた辰馬家は困惑しましたが、鉄斎のたつての願いを断ることもできず、富岡家と相談の上、鉄斎の存命中に限って貸し与えることにしました。事情を知らない鉄斎は歓喜して箱書をしたためましたが、鉄斎の没後、再び辰馬家に返却されました。



山碧水明印並副巻 頼山陽刻 江戸時代 19世紀

※所蔵の記載のない作品は、すべて辰馬考古資料館の所蔵品です。

【関連土曜講座】 会場：平成知新館 講堂 時間：午後1時30分～午後3時

辰馬考古資料館収蔵品の来し方行く末

8月22日[土] 講師：青木政幸氏(公益財団法人辰馬考古資料館 学芸員)

今日は京博で辰馬考古資料館の銅鐸を見よう

8月29日[土] 講師：難波洋三氏(京都国立博物館 名誉館員)

※定員200名。聴講無料(ただし、当日の観覧券等が必要)。当日午前9時30分より平成知新館1階インフォメーションにて整理券を配布し、定員になり次第配布を終了します。

京都国立博物館
東山七条 KYOTO NATIONAL MUSEUM

〒605-0931 京都市東山区茶屋町527 TEL:075-525-2473(テレホンサービス)
https://www.kyohaku.go.jp/ X(旧Twitter)/Instagram @KyotoNatMuseum

このリーフレットは、ミュージアムパートナーの皆さまの支援を受けて制作しました。
[ゴールド]土屋 和之/株式会社SCREENホールディングス/株式会社 俄
一般財団法人NISSHA財団

[シルバー]学校法人 二本松学院/東レエンジニアリング株式会社/伊藤正人/岡田啓示郎
[ブロンズ]原田清朗/片山明/原田佳織

本文の執筆は、石田由紀子、福士雄也、綾納民之(以上京都国立博物館)、青木政幸(辰馬考古資料館)、難波洋三(京都国立博物館名誉館員)が担当した。
2026年7月14日発行

